

バチエラー・オブ・アーツ 栗野頼之祐の「出土史料によるギリシア史の研究」
マスター・オブ・アーツ に対する授賞審査要旨

本書は左の五篇の論文から成つている。

一、ツェノーン草紙文書

西紀前三世紀のエジプトに於ける統制経済、社会事情を伝えるギリシア人の書簡文書集

二、ツェノーン草紙文書に現れたる麦酒業事件

三、アテナイの図書館とその発掘碑文

四、安息王アルタバノス三世王令のギリシア碑文について

五、古代ギリシアの戦没戦士を弔祭する制度について

以上の諸論文は著者が外国留学中の研究業績の一部で、いずれも一九三五年から一九四三年に亘り、「社会経済史学」「史学研究」等の学術雑誌に発表されたものであるが、それ等に最近の研究による補修を加えて集録したものが本書である。上記の諸論文は一九二〇年代より三〇年代に亘る最近の出土史料（パピルス文書及び碑文）による詳細なる文献的研究と欧米諸学者の研究成果とに基き、古典時代よりヘレニズム時代に亘るギリシア史上の諸問題の解決を試み、更にヘレニズムの運命にまで論及を企てたもので、最新の史料を根拠とする著者の意見は、従来の通説を訂正し、将

来の研究に重要な示唆を興える点が少くないのである。

以上諸論文のうち、主要なものには第一論文であるが、それはその副題の示す如く、西紀前三世紀に於けるエジプトの統制経済及び社会事情を明らかにする為、最近の発掘史料として有名なツェノーン文書の紹介と解釈とに努めたもので、著者は同文書の検討により、初期プトレマイオス朝のエジプト統治策の真相を描き出そうとしている。この点では著者はロストヴツェフの著「紀元前三世紀エジプトの大莊園」(一九二二年)に負う所が少くないと認められるが、本書では各文書の一層具体的な解明に力が注がれている。

元来当時のプトレマイオス家のエジプト統治策については、種々の論争が行われていたが、著者は問題解決の鍵をツェノーン文書に求め、当時のエジプトの一莊園管理者たるギリシア人ツェノーンの生活した世界を見極め、それ等莊園の組織と経営法とを明かにし、更に統制経済策の一般、金銀の比率、通商政策及び貴族生活、民間宗教等の諸問題について、その実相を描くに努めた(二六一—四三頁)。そうして広く関係文献を渉猟しつつ、刻明なる部分的研究より全般的考察へと研究を進め、プトレマイオス朝のエジプトと、セレウコス朝のシリアとを比較し、後者の土着民ギリシア化政策に対して、前者のエジプトをギリシア化する方策は失敗に帰したと結論している(九二—一九七頁)。要するにエジプト国民の強い民族意識とその他の特殊事情とは君主をして国家統制と独占支配組織とを強行せしめるに至つたが、それを具体的に証明するものは、ツェノーン文書であるとした(九七—一〇七頁)。また対外政策に於て初期プトレマイオス朝が攻勢的帝国主義をとつたことを主張して、従来の論争に一の解決を興えているが、この点で著者の立場が、ロストヴツェフやコルネマンのそれと異なり、ほぼウイルケンのそれに等しいことを示している。(一一—二、

一〇二頁)。要するにヘレニズム時代の内でも、史料の欠乏した初期プロトレマイオス朝に関して、著者がヴェノーンの文書を通じて当時の真相を究明しようとした努力は注目し得る。また第二論文は第一と同じく、ヴェノーンの文書の研究で、特に麦酒製造業に関する収税不正事件を主題としたもので、(一一四—一二〇頁)、併せて当時の麦酒製造に対する政府の保護政策について論じている(一二三—一四頁)。要するに本篇は第一論文の副研究とも見るべきものであるが、ここでは一九三二年及び四一年発表の新史料が用いられているのが注目される。

次に第三論文は古典ギリシア時代に関するもので、発掘碑文とそれに関する諸家の研究とを検討してギリシア文字の起源を論じ、フェニキア文字を以てその起源とする旧説を一層明確にし(一三三—一九頁)。更にアテナイの図書館の発生及びその経過を論じて(一四〇—一六二頁)、ギリシア文化発展の上に図書館の有する意義の大なることを述べている(一六四—一五頁)。小篇ではあるが、本篇はギリシア文化の研究に寄與すべき好論文である。

第四論文は西紀第一世紀の初め、安息王アルタバノス三世時代の碑文(一九三一年頃スーサ発掘)の研究である。著者は碑文を根拠として安息に於けるギリシア都市の内政問題を論じ(一九六—二〇四頁)、更に安息国家及び東方ヘレニズムの運命に関する一般問題にまで論及している(一六七—一九五、二〇五—一六頁)。本篇の論旨は、安息国内に於てギリシア化政策が相当強く行われ、西紀第一世紀にもなおそれが衰退を示していなかつたことであり、それに依つて、東方ヘレニズムの早期没落を主張するマイヤー等の所説に訂正を加えている(二〇二—二一三、二二二—二四頁)。その他所々に述べられた著者の見解により、東方諸国に於けるギリシア文化の進出がいかに根強く行われたかが注目される(二〇五—一九、二二四—一五頁)、そうしてその半面に又土着勢力が容易にギリシア勢力と融和せず、東西対立の深刻

であつた情勢も看取されるのである。

最後の第五論文は、古典時代のギリシアに於て、戦死者弔慰のため行われた墓前競技会と墓前弔辞とについて、主としてその起源及び年代の究明を試みたもので、広く古来の文献を涉獵すると共に、最近発掘の史料殊に多数の碑文の詳細なる叙述と解釈とに努めている。著者は競技会の起源、内容等につき考証すると共に墓前弔辞の風習がペルシア戦争以後に起つたとする通説に對して、それが同戦争以前に行われていたことを主張し、ソロン時代に既に制度化されたとして、ウェーバー等の説に賛成している(二八〇—二八五頁)。なお結論として、元來宗教的起源のものであつた戦死者弔慰の風習が、アテネ國家の發展と共に政治化されて、國民の愛國心を刺戟し、軍事教育振興の一段となつて、都市國家の隆昌とアテネ文化の發展とに貢獻したと述べているのは注目し得るものと思ふ(二八五—二八六頁)。

本書を通過して、著者の根本史料に即する真摯なる研究態度と広汎なるヘレニズム研究に寄與せんとする努力とは著しい。但しギリシア文化がその發生の初期よりして、ヘレニズムの世界的潮流となるに至つた歴史的過程の問題について著者が意圖した所は(序文)、本書に於ては充分に達せられていない。またヘレニズム諸君主の政策とギリシア文化の運命との關係も、單に政策的見地からしてのみ取上げてゐるのは、使用した史料の性質上已むを得ない結果であるが、なお、多方面よりの研究を必要とすることは明かである。なお、訳文及び用語について妥當を欠く点も若干認められる。固より世界史に於ける東方と西方との交渉關係をめぐるヘレニズムの問題は、本書によつて解決されるには余りに広汎且つ複雑であるが、著者が零細なる具体的研究より出發して、問題の究極にまで論究を進めようとした試みは、ヘレニズム研究に寄與する所が少くない。但しギリシア文化を以て、ギリシア本土に生れた独自のギリシ

ア的所産とし、それと東方諸文化との対立の上に、ヘレニズム文化の性格を規定した著者の見解は、種々批判の余地を存するものであろう。(本書二〇六、二二四頁その他本書以外の著者の論文参照)。要するに文献学者としての立場と歴史学者としての立場とを合致せしめることは容易の業でない。殊に根本史料の操作に便宜を欠く本邦の西洋史研究者にとつて困難の問題であるが、その困難の克服が多少なりとも本書に於て試みられたことは明白である。以上の点に於て本書のもつ意義は認めらるべきであり、本書が本邦に於ける西洋史研究の水準を高めるものとして、学界に少からぬ刺戟を與えることは疑ないのである。